



TITLE:

京大広報 No. 449

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 449. 京大広報 1993, 449: 563-568

ISSUE DATE:

1993-06-01

URL:

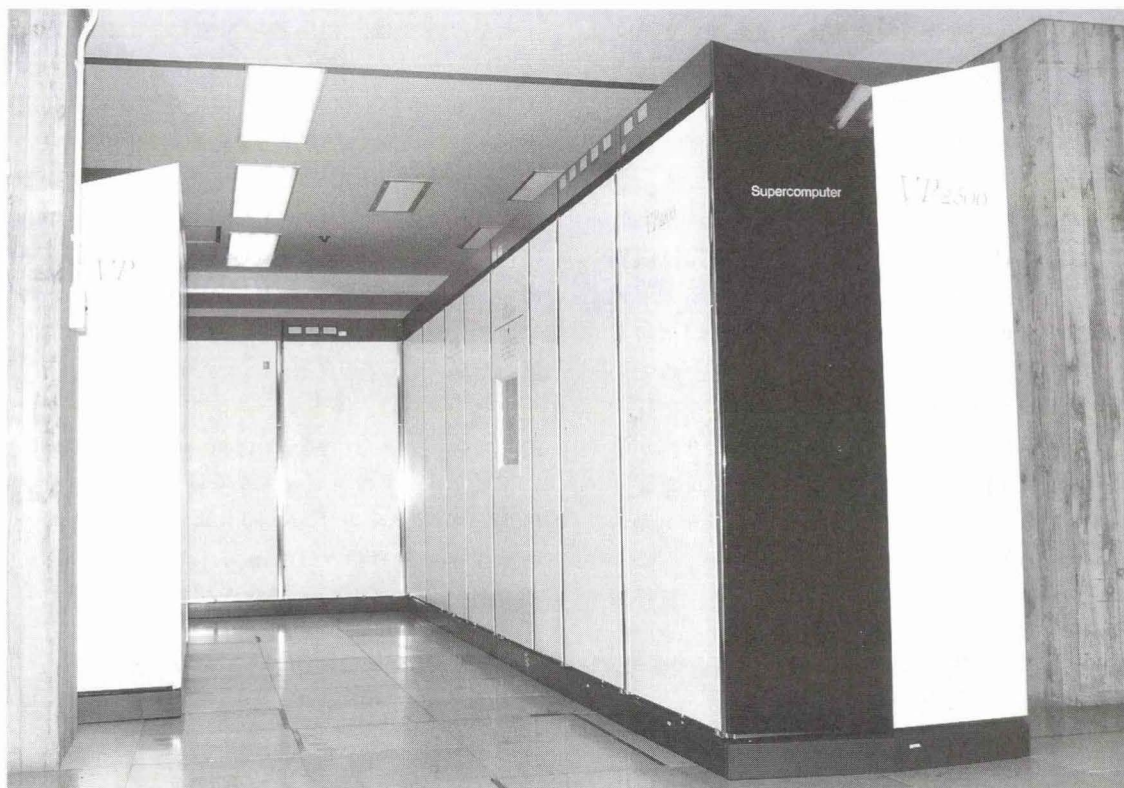
<http://hdl.handle.net/2433/209190>

RIGHT:

京大広報

No. 449

京都大学広報委員会



大型計算機センター スーパーコンピュータ

—関連記事本文564ページ—

目 次

<紹介>

大型計算機センター……………564

計報……………566

平成5年度創立記念行事音楽会の開催……………567

<コラム>

一 風景

Y. K 生……………568

< 紹 介 >

大型計算機センター

大型計算機センターは、全国の大学・高等専門学校などの研究者が、学術研究のための計算や情報の処理を行うための全国共同利用施設である。昭和44年（1969）1月から計算機システムの運用を開始し、来年1月で25周年を迎える。

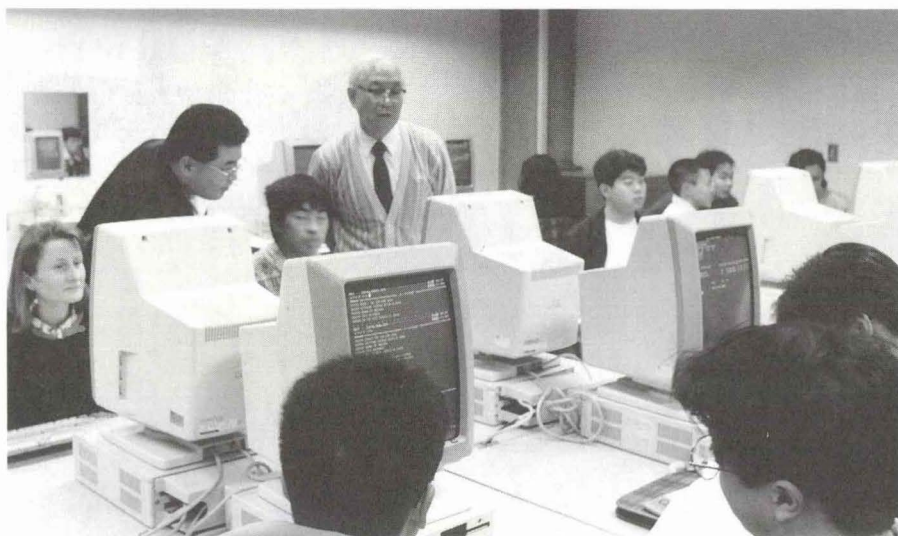
現在のセンターのシステムは、汎用大型計算機 Fujitsu M-1800 とスーパーコンピュータ Fujitsu VP2600 から成っており、大規模高速計算処理、データベースの構築及び検索、画像処理、デスクトップパブリッシング、電子メールや電子ニュースなど多岐にわたって利用されている。昨年度（平成4年度）の年間稼働時間は7,480時間、スーパーコンピュータのターンアラウンドタイム（プログラムを投入後、実行が終了するまでの待ち時間）は最大152時間で、システム性能のほぼ限界まで利用されており、より高速なシステムの導入を検討中である。昨年度の総利用者数は4,444人で、学内利用者が依然として半数強を占めている。しかし、センター内端末の利用は従来に比べて減少しており、現在では利用者のほぼ9割が学内の LAN（構内ネットワーク）や電話回線などを經由して、パソコンやワークステーションからセンターのシステムを利用している。

センターでは情報検索システムとして、三種類

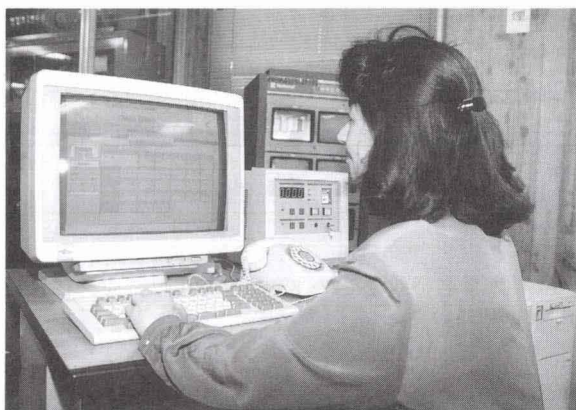
のデータベース管理システムを運用している。これらを用いて、利用者は過去の研究成果の蓄積あるいは検索を行うことができ、研究を進める上で大いに役立っている。こうして作成されたデータベースの多くは、センターにおいて公開され、さらに多くの利用者にも利用が可能になっている。また、過去から最新にわたっての学術論文を調べることは研究を進める上で重要な手段であるが、常に各分野にわたる最新の文献情報を提供する INSPEC のようなデータベースのサービスも行っている。

センターでは、利用者を対象に、TSS 入門、スーパーコンピュータの使い方、統計パッケージ入門、データベース検索といったセンターの利用手法・技術に関する講習会を年間約30回開いている。講習では、大型カラーディスプレイに端末画面や資料を表示した解説と、端末での実習を中心に行っている。また、全国共同利用機関でもあるので、他大学でも遠隔地講習会を開いている。昨年度は、滋賀医科大学、徳島大学、山口大学で開催した。

本センターは、キャンパス情報ネットワークに関しても、大きな役割を受け持っている。従来のコンピュータとコンピュータを結ぶネットワークに加えて、LAN と LAN、即ちネットワーク同士を結ぶネットワーク（IP ネットワークという）が急激に多くの大学、研究機関等で普及してき



端末を用いた実習風景



計算機システム監視(集中監視室)

た。このような IP ネットワークは、日本国中はもちろん、米国や欧州の各国など世界中の数多くの国々とも接続されてきている。また、KUINS(京都大学統合情報通信網)に接続された研究室のコンピュータで、世界中の研究者と電子メールを送受信することや、国内外のコンピュータに直接アクセスすることが可能になっている。KUINS ネットワーク機構を支援する本センターは、このような KUINS の維持・管理や新しい技術の導入に積極的に貢献するだけでなく、全国共同利用施設として、第5地区(京都府、滋賀県、富山県、石川県、福井県、鳥取県、島根県)を主とした地域ネットワーク NCA5 なるグループを構成し、他大学等に対して、IP ネットワークに関する情報交換及び技術支援を行おうとしている。

センターでは学部生に対する教育活動として本年4月から全学共通科目「コンピュータ概論(通年)」を開講した。コンピュータのハードウェアとソフトウェアの概要及び最新の話題を取り上げて講義を行うほか、簡単な実習も予定している。

また、大型計算機センターの研究開発部では、工学研究科応用システム科学教室の協力講座「応用情報学講座」を担当し、大学の研究活動にも参加している。昨年度は本講座で4人の修

士修了者があった。研究テーマは、オペレーティングシステムの性能評価、ビジュアルなソフトウェア仕様化、テキスト検索に関するものであった。現在は、また4名の修士課程の学生が研究を行っている。

研究開発部には、三つの研究室がある。それらの研究テーマの概要は次のとおりである。

1. 情報システム研究室

計算機システム、特にオペレーティングシステム及び情報通信システム(コンピュータネットワーク)に関する構成・機能・方式について研究している。

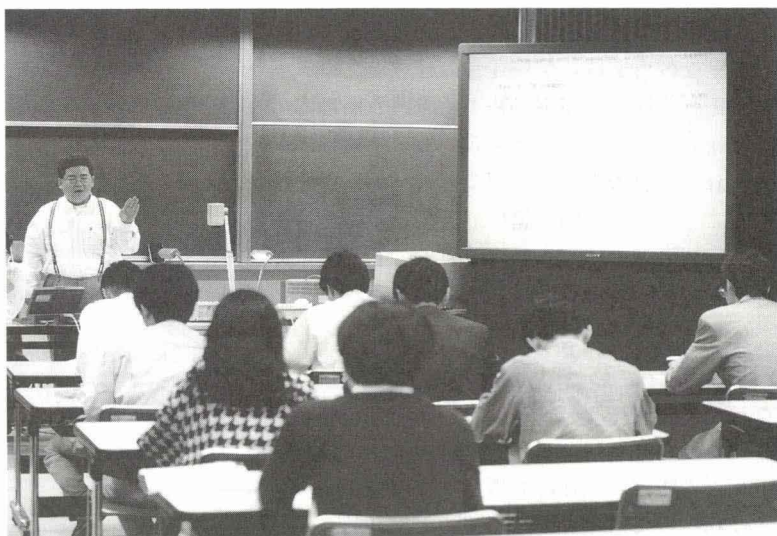
2. ソフトウェア研究室

計算機システムにおける言語処理システムとソフトウェア工学及び計算アルゴリズムに関する研究を行っている。また、運用中あるいは運用予定のソフトウェアの評価や使い勝手の向上を目指した研究を進めている。

3. 応用情報処理研究室

データベースの構築と利用、図形及び画像処理などの計算機処理技術につき研究を行っている。特色としては、古典テキスト等の高度な情報のデータベース化など計算機を用いた人文科学の研究支援方式、マルチメディア・データベース及び分散データベースに関する研究開発を行っている。

(大型計算機センター)



大型ディスプレイによる講習

訃 報

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(教育学部)

片 岡 仁 志 名誉教授

本学名誉教授 片岡仁志 先生は、5月17日逝去された。享年91。

先生は、昭和2年3月京都帝国大学文学部を卒業後、大学院に進まれたが、昭和3年教育界に入り、師範学校、高等女学校の教諭を経て、昭和15年以降高等女学校、新制高等学校等の校長職を十余年にわたり歴任、昭和25年7月京都大学教育学部教授に就任され、昭和40年3月、停年により退官された。

本学退官後は、華頂短期大学教授に就任、同56年3月に退職された。昭和49年6月京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生は、本学部において教育指導講座を担当され、創設直後の教育学部の充実に献身的な努力を傾けられるとともに、本学における教職教育の実施責任者としてその体制づくりに尽力された。その間、昭和26年6月から同28年5月までと昭和36年6月から同38年5月までの2回、京都大学評議員として大学の管理運営に貢献された。また、先生は日本教育学会の理事及び関西教育学会の副会長として学会の発展に寄与されるとともに、その高潔な人格によって学校教育関係者に多大の影響を与えられた。

先生の学問的特色と業績は、長年にわたる真摯で豊富な教育実践と学校運営の経験を、カント及び西田哲学研究と参禅に基づく深い人間理解のもとに統合して独自の人格主義的教育指導理論を確立され、今日の生徒指導理論の哲学的基礎を築かれたことにある。同理論は最近における生徒指導上の困難の根本的解決に資するものとしてその評価を高めている。

先生はまた、西田哲学研究会である「寸心会」の世話役として『西田幾太郎遺墨集』の刊行など、禅を中心とした日本文化の保存、普及、振興と国際交流にも尽力され、さらに晩年まで出家前の在家の居士の教育にも当たられた。

これらの功績により、昭和50年4月勲三等旭日中綬章が授与された。

平 野 俊 二 名誉教授

本学名誉教授 平野俊二 先生は、4月18日逝去された。享年64。

先生は、昭和29年本学文学部を卒業後、本学教養部助手、東京大学文学部助手、大阪市立大学文学部講師、同助教授、本学文学部助教授を経て、昭和55年文学部教授に就任、平成5年3月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和60年9月には学生部長事務代理、同63年4月から平成3年4月まで文学部評議員等を歴任され、大学の管理運営に貢献された。

先生の専門は心理学で、学習・記憶の基礎的過程に関する生理心理学的研究において数多くの優れた業績を残された。なかでも脳の海馬の機能と記憶の固定に関する綿密な研究で学界に大きく貢献された。

主な著書に『行動の生物学的基礎』、『適応行動の基礎過程』、『記憶痕跡の探求』等がある。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(文学部)

平成5年度創立記念行事音楽会の開催

本学では、6月18日の創立記念日を祝し、下記の音楽会を開催いたします。本学教職員・学生の来聴を歓迎します。

記

日 時 平成5年6月17日(木) 午後6時開演
会 場 京都会館第二ホール
左京区岡崎(市バス・東山二条下車)
名 称 久保陽子・弘中 孝 おしゃべりコンサート
演 奏 者 久 保 陽 子 (ヴァイオリン)
弘 中 孝 (ピアノ)

プ ロ グ ラ ム

J. S. バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番
ベートーヴェン：ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第9番「クロイツェル」
休 憩
ブ ラ ム ス：ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第1番
マ ス ネ：タイースの瞑想曲
ク ラ イ ス ラ ー：中国の太鼓
サ ラ サ ー テ：ツィゴイネルワイゼン

(演奏者略歴)

久 保 陽 子

1962年桐朋学園高校卒業。チャイコフスキー国際コンクール第3位入賞。1963年フランス政府給費留学生としてパリに留学し、ルネ・ベネッティ、ジョセフ・カルベに師事。1964年パガニーニ国際コンクール第2位入賞。1965年ロン・ティボー国際コンクール第2位入賞。1967年スイスにて、ヨーゼフ・シゲティに師事。クルチ国際コンクール第1位入賞。以後研鑽のかたわらフランス、イタリア各地で演奏活動を行う。1972年に帰国後、夫君である弘中 孝らと桐五重奏団を結成。1974年民音室内楽コンクール第2位、斉藤秀雄賞を受賞。

弘 中 孝

桐朋学園高校音楽科を経て、同大学音楽部へ進む。1961年音楽コンクール第1位特賞並びに安宅賞を受賞。翌年第1回バン・クライバーン国際ピアノコンクールに日本代表として参加し入賞。1963年～1965年フルブライト給費留学生として米国、ジュリアード音楽院でゴロニッキーに師事。1967年より渡仏。1968年第1回シフラ国際コンクール第1位金賞。ロン・ティボー国際コンクール第4位入賞。その後、我が国の各オーケストラとの共演など、我が国ピアノ界の第一人者として活躍中。

入 場 無 料

備考：職員証又は学生証等を持参して下さい。

定員は950名先着順とします。

(学生部)

洛書

突然車が減速しやがて何台かの車の列の後ろで停止した。1989年7月

日本の初夏を思わせるような夕刻、ポーランド、ルブリン市へ戻る途中の出来事である。

運転のG先生に理由を尋ねたら前方に踏切があり列車がくるからだとのこと。4、5分経ってもこないで再びどうしたのかときくと10分ぐらい待つとの返事、どうしてそんな当たり前のことを聞くのかと言った調子。退屈なのでおりて列車の写真でもとろうとしたら、鉄道網は軍事機密の対象なので撮影は禁止であると制止された。

そういえば、ワルシャワでも外観が何でもないので写真禁止のマークのある建物をいくつか見かけたのを思い出した。案内してくれたK先生によれば軍関係の建物

とか。今時、数え切れないほどの人工衛星で何もかもお見通しなのにと思いながらも迷惑をかけてはと素直にしたがい、ふ

と車の外に目をむけたら、おばあさん、主婦、子供達など農家の家族とおぼしき人々が三々五々、プラットホームだけといった駅の方にむかって、いかにも楽しげに話をしながら歩いていくのが目に入った。やがて子供達は踏切と駅との間に設けられた申し訳程度の柵のうえに乗り、首を延ばしやがて入ってくる列車のくる方向を身を乗り出して眺めている。近くの都市で一日働いて疲れて帰ってくる一家の主を迎えに来たのであろう。昔の日本でもよく見かけたに違いない風景に出くわしポーランドに来て以来はじめてほっとした気持ちになった。

日差しのやや強いワルシャワ空港に着いたのは数日前の昼下がり、降りた途端終わったはずの花粉症が再発し、それが花粉ではなく、ただただお見事という他のない堂々と立ち昇る石炭火力の排煙によるものであることが分かったのはやや後からであった。遠くからみるときれい

に見える首都の重厚な建物群もそのいくつかは近づくともぞっとするほど汚れており、すさんだ心の荒廃が否応なく旅人には感じられ、航空チケットカウンターでの信じがたい官僚的事務能率の悪さに仰天し、またショパンの生家へいく途中のあらゆる森という森で行われたという名状しがたい暗い歴史、等々この国の暗い印象のみが日毎に強くなっていただけに、本来とりたてて何でもないはずの光景が私にはたいへん新鮮で人間性の確かな面が強く印象づけられたからだと思う。

より幸福な暮らしを目指して科学技術にかかわる研究に従事しているひとりとして最近「一体幸福とはなにか？」と自問する機会が多くなった。「科学技術は人間の知的欲求を満たし、人間をより自由にするが故に善である」というような話もある（あった？）らしいが、物質的（重量的？）に豊かになったといわれる我が国の現実を考えるとますます考えさせられる。

Y. K 生

科学技術の急速な進展、競争の激化とともに

仕事の量が多くなり本来の「ゆとり」とは正反対の生き方を強いられ、子供達は競争社会で本来の生き方から過度の逸脱を余儀なくされ、またサラリーマンはその一生をまっとうに働いても首都圏などでは住宅購入さえむずかしいなどの現実。

「これからの我が国は“東欧の日本”をめざすのだ」と別れ際無邪気に語ってくれた親日的なK先生の言葉を聞いたときは、地政学的な歴史的理由によるものであることを重々知りつつも、日本人としていささか面はゆいがうれしい思いをしたものであったが、今は「もはや科学技術至上主義への傾倒は是正すべき時にきており、むしろあのすばらしい家族の絆を守ることこそが第一義的な幸福の条件で科学技術はあくまで第二義的ですよ」と手紙に書くことがポーランドファンの一人名になった私の責務かなと考えている。

一 風 景